

20191220 樹木における2つの成長ステージ

樹木は絶えず新しい芽を出しながら成長を続けるので、伸びたり太ったりする部分については、若木だけでなく古木・老木であっても、常に新しく作られた生きた細胞群のみで構成されるという。

花が作られるのも、この新しくできた芽に限られる。

花が咲くためにはつぼみ(花芽)が作られることが前提となる。

樹木の場合には、種子が発芽したその年に花をつけることはない。

花をつけるまでの栄養成長期間が長いので、その間に樹体の基礎を作る必要があるからである。

低木類は、実生からおおむね3~5年で花を開き始めるが、高木類 例えばヤマボウシでは15年前後、イチヨウだと開花までに30年かかるといわれている。

樹木が生殖期間に入るまでに、樹勢に応じた基礎体力をつけることによって、ほかの樹種との受光競争に伍していかなばならないという厳しい生き方を求められるからである。

このように多くの樹木は、発芽後の数年間は花をつけない。この期間のものを幼期または栄養成長期の樹木と呼ぶ。これに対して、環境条件さえ整えば花をつける状態になったものを花熟期あるいは生殖成長期に到達した樹木と呼ぶことができる。

多くの樹木では、開花前年の6~8月にかけて花芽ができる。その年が高温で、夏に乾燥していると、根から吸収する窒素化合物に比べて、葉の炭酸同化産物が多くなり、花つきが良くなるといわれている。

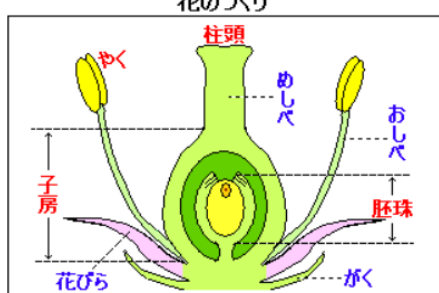
ヤマボウシではおよそ5年に一度、大豊作だといわれる年が巡ってくる。

果樹園では果実の付き具合を毎年安定させるために、剪定したり摘果したりして、花付きを調整するし、シャクナゲのように花を楽しむものでは、開花後に幼果を摘み取って、樹体の消耗を防ぐ手助けをする。

ブナ科の樹木の果実を指す総称であるドングリについても、何年かに一度、大量に実ると、次の年は少ししか実らない。この「なり年現象」は植物の戦略だと考えられる。毎年たくさん実らせてしまうと、ドングリを食べて動物が増え、せっかくの実も、結局ほとんど食われてしまうことになる。しかし実り具合を不定期に変動させれば、不作年の後には動物が減り、そこで大量に実らせれば、大半が食われずに生き残ることができるということになる。

(上述は多田多恵子博士や八田洋章博士の著作を参考にしたものである。)

参考 被子植物の花のつくり



花のめしべ

柱頭・・・花粉が付く場所

胚珠・・・受粉後、種子になる部分

(被子植物の胚珠はめしべの内部に隠されている)

子房・・・胚珠を包む部分

花のおしべ

やく・・・花粉が入っている部分